

機織りハンドメイドポーチ ができるまで



① 綿糸(未精錬) めんし みせいれん

未精錬の糸には、油や汚れがついています。
不純物がついていると、染まりにくいので、不純物を取り除く次の工程「精錬」をします。



② 精錬 せいれん

不純物を取り除く作業です。
苛性ソーダ(水酸化ナトリウム)+添加物が入っていない中性洗剤で煮て、油や汚れを落とします。



③ 白糸を藍染

あいかめ
藍甕に糸を浸し、染めたい藍色になるまで染め重ね、すすいで乾かします。(埼玉県羽生市の中島紺屋で藍染)





④糊つけ

しょうふ
正麩で糊つけします。糊つけすることで、糸は毛羽立たたず、扱い易くなります。



⑤巻き取り

いとわく
糸枠に糸を巻き取ります。



⑥整経

せいけい
織る布の長さ・幅に必要な糸を、整径台を使って揃えます。



⑦仮箆

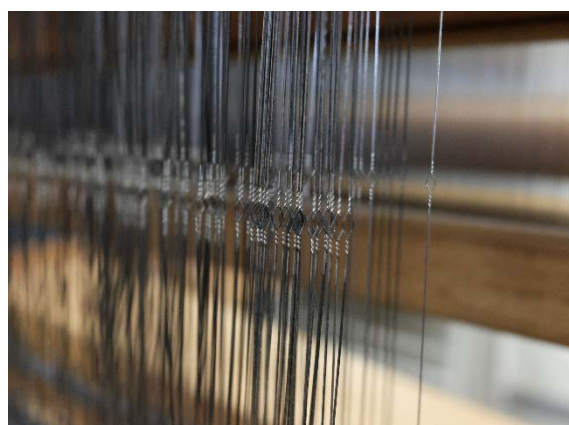
かりおさ
⑥で揃えた糸を自分の織りたい物の幅になるように、仮として箆に通します。



⑧ 巻き込み

仮筈した糸を機の「千巻」^{ちまき}に巻き込みます。

巻きこむ糸が絡まらないように、厚紙などを挟んで巻きます。はさんだ厚紙などのことを「はたくさ」と言います。



⑨ 綜統そうこうとおし通し

⑩ 筈おさとお通し

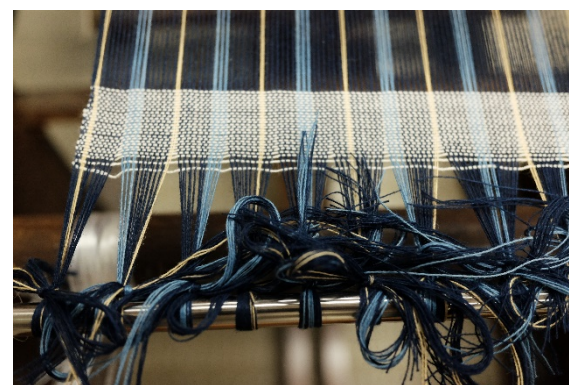
男巻に巻き込まれた糸を綜統・筈の順に通します。

この小さな穴(綜統)に糸を通し、そのあとに狭い隙間に糸を通していきます。(筈)



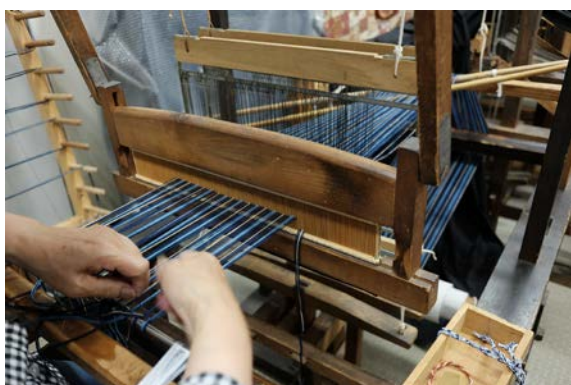
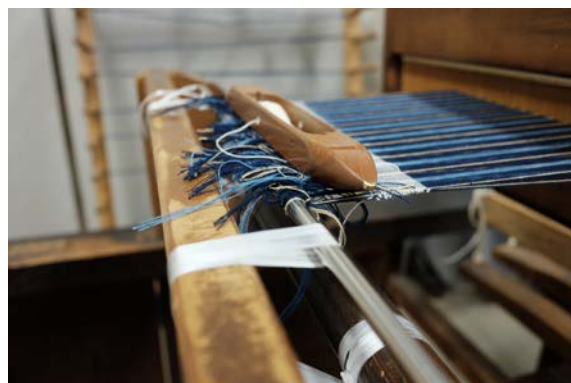
⑪ 織りつけ

織りつけ棒に糸を結びます。すべての糸が同じテンション(張り具合)にならないと、きれいに織れません。



⑫機織り

高機を使って、裂いた布を緯糸として板杼に巻き、左右から交互に入れ、箆柄を“トントン”と打ち込み、一段一段と計画した大きさまで織ります。最後に手縫いをして完成です。



このような工程を経て、出来上がった世界にひとつだけの手作りポーチができました。このポーチは松戸市立博物館友の会で作ったものです。仕上がりには何日間もかかります。お好みの一点を見つけてみてください。

松戸市立博物館では、友の会と共催で機織りが体験できる催し物を行っています。

現段階では、新型コロナウイルスの関係で実現できるかわかりませんが、新型コロナウイルスが収束し、織りの好きな方にお会いできるよう祈っています。